

## ポー・カレン語の語順

加藤昌彦 [Atsuhiko Kato] (大阪大学言語文化研究科言語社会専攻)

ポー・カレン語の基本的な語順を概観した後、語順が重要な役割を果たす現象を見ていく。

### 1. ポー・カレン語(Pwo Karen)とカレン語群について

シナ・チベット語族チベット・ビルマ語派(Tibeto-Burman)カレン語群(Karenic)<sup>i</sup>

チベット・ビルマ語派に属する言語の大部分は SOV 型だが、カレン語群に属する言語はすべて SVO 型の孤立語的言語。モン・クメール(Mon-Khmer)系言語との接触で語順が変化(?)。



図 1: Benedict (1972)

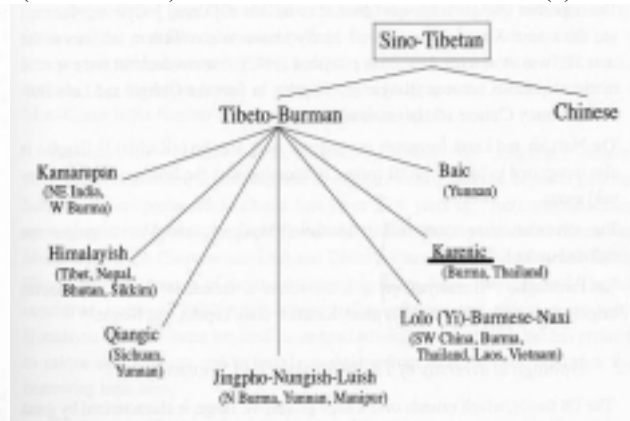


図 2: Matisoff (2003)

新谷忠彦(p.c.)によれば、40種類以上のカレン系言語が存在する可能性がある。

狭義のカレン族の話す言語にはスゴー・カレン語とポー・カレン語がある。ともにタイ・ミャンマーの国境地帯からエーヤーワディー川のデルタ地帯にかけて話される。

表 1: ポー・カレン語の方言区分と話される地域(Kato 2009)<sup>ii</sup>

方言区分	地域
西部ポー・カレン語	ミャンマー連邦エーヤーワディー管区
トークリーバン・ポー・カレン語	ミャンマー連邦モン州ビーリン地区
東部ポー・カレン語	ミャンマー連邦カレン州、モン州、タニンダーイー管区、タイ王国中西部
北部ポー・カレン語	タイ王国北西部

ポー・カレン語も他のカレン系言語と同様、孤立語的な SVO 型言語。単音節的傾向。時制はなく modality が重要。主題卓越(topic-prominent)。品詞は名詞、動詞、副詞、助詞、感嘆詞。

## 2. 様々な要素の順序

### 2.1 項と動詞

- (1) phlònmwì yê  
客 来る 「客が来た」 (「客」が定であれ不定であれ不変)
- (2) θà?wà dós θàkhléin  
Thawa 殴る Thakhlein 「ターワーはタークレインを殴った」
- (3) θà?wà phílân θàkhléin khòθá  
Thawa 与える Thakhlein マンゴー 「ターワーはタークレインにマンゴーをやった」

### 2.2 側置助詞と名詞

- (4) θà?wà mà chəmà ló yéin phèn  
Thawa する 仕事 Loc 家中 「ターワーは家の中で仕事をした」

### 2.3 名詞と状態動詞、助数詞句、指示語

- (5) já phàdót θōN béiN jò  
魚 大きい 三 NC(薄い物) この 「この3匹の大きな魚」

### 2.4 名詞と名詞

- (6) pəθábáN kòtNlŵē  
若者 組織 「若者からなる組織」
- (7) chərá (ʔə) yéiN  
教師 his 家 「先生の家」
- (8) pəjàN khāN ~ khāN pəjàN  
ビルマ 国 国 ビルマ 「ビルマ国」(地名と普通名詞のとき二種類の語順)

### 2.5 関係節と名詞

- (9) phlòtN [ yê lá phòtN thīkhāN jò ] <主語の場合> (関係節内で動詞は必ず先頭)  
人 来る Loc カレン 国 この 「カレン州に来た人」
- (10) [ jə tháv lá dàv phəN ] khánphài nó <非主語の場合>  
1sg 履く Loc 部屋 中 草履 その 「私が部屋の中で履いているその草履」

### 2.6 副詞的要素と動詞

- (11) θàʔwà mà (chəmə ) yìyì  
Thawa する 仕事 良く 「ターワーは仕事を上手にする」

### 2.7 動詞助詞(verb particle)と動詞

- (12) jə bá ʔán jō phlòtN chəʔánchəʔò  
1sg Vpt:must 食べる Vpt:try.to カレン 食べ物 「私はカレン料理を食べてみねばならない」

### 2.8 「疑問を表す助詞の位置」および「疑問語の位置」

- (13) nə mə lì ká <真偽疑問文>  
2sg Irr 行く Que 「あなたは行きますか」
- (14) nə mə ʔán chənó lê <疑問語疑問文>  
2sg Irr 食べる 何 Que 「あなたは何を食べますか」

### 2.9 否定辞と動詞

- (15) ʔəwê yê ʔé <主節の場合>  
3sg 来る Neg 「彼は来なかった」
- (16) jə lə lì bá ʔəkhóçòN ... <従属節の場合> (lə と bá で述部を挟み込む)  
1sg Neg 行く Neg ので 「私は行かなかったので...」

### 2.10 従属節と主節

- (17) bê təwāN mə dŵeāthánthô θò | phòʔwà káv mà lā  
ように 村 Irr 発展する ように Phawwa 努力する する ~ であれ  
「村が発展するように、パワーは努力せよ」

### 3. 動詞連続と語順

動詞連続<sup>iii</sup>には連結型(concatenated type)と分離型(separated type)の 2 種類がある。連結型は V1 と V2 の間に他の要素の介在を許さないのに対し、分離型は他の要素の介在を許す。2 種類はいずれの動詞に否定辞 *lə* が前置されるかによって区別できる。

(18) *jə lə li xwè bá ?əkhóçòn ...*  
 1sg Neg V1:行く V2:買う Neg ので 「私は買いに行かなかったので...」

(19) *jə ?ó lə máv bá ?əkhóçòn ...*  
 1sg V1:居る Neg V2:心地良い Neg ので 「私は体調が悪いので...」

#### 3.1 連結型

基本的には時系列順に動詞が並べられる。自動詞・他動詞の組み合わせに基づき 4 つに分類できる。V1 と V2 の意味的關係は、「手段 - 目的」「原因 - 結果」など。V1 と V2 の間には決して他の要素が入らない。V1 と V2 の形態統語的關係についてはまだ結論を得ていないが、動詞連続全体で複合動詞を成している可能性がある。(a)~(d)のそれぞれに「意志性の組み合わせ」「項の共有」「名詞句の取り方」の制限がある。太字は名詞句の取り方を決定する側の動詞。

(a) **自動詞 + 自動詞** 自動詞 V2 が無意志のとき結果を表す  
 [意志] + [意志] [意志] または [無意志] + [無意志] [無意志],  $S_1=S_2$ , 名詞句の取り方:V2

(20) *?əwê chinàn kòèà*  
 3sg 座る 叫ぶ 「彼は座って叫んだ」

(21) *?əwê lánthé θi mèin*  
 3sg 落ちる 死ぬ (成り行き) 「彼は落ちて死んだ」

(b) **自動詞 + 他動詞** 他動詞  
 [意志] + [意志] [意志] または [無意志] + [無意志] [無意志],  $S_1=A_2$ , 名詞句の取り方:V2

(22) *jə li xwè já*  
 1sg 行く 買う 魚 「私は魚を買いに行った」

(23) *?əwê lánthé bá ká*  
 3sg 落ちる ぶつかる 車 「彼は落ちて車にぶつかった」

(c) **他動詞 + 他動詞** 他動詞  
 [意志] + [意志] [意志] または [無意志] + [無意志] [無意志],  $A_1=A_2$ , 名詞句の取り方:V2

(24) *jə chùlàn ?án mì dē já?úthí*  
 1sg 入れる 食べる 飯 with 魚醬 「私は[魚醬をご飯に混ぜて]魚醬でご飯を食べた」

(25) *?əwê θijá náθi ?əyāin?əçòn*  
 3sg 知る 理解する 事情 「彼は事情を知って理解している」

(d) **他動詞 + 自動詞** 他動詞 V2 は目論まれた結果を表す  
 [意志] + [無意志] [意志],  $O_1=S_2$ , 名詞句の取り方:V1

(26) *jə dō θi thwí*  
 1sg 殴る 死ぬ 犬 「私は犬を殴り殺した」(私は殺そうと思って犬を殴った)

#### 3.2 分離型

V1 と V2 の間には V1 の目的語などの要素が介在できる。これが連結型との大きな違い。おそらく分離型は VP の連続であり、その点で連結型と構造そのものが異なると考えられる。分離型に現れる動詞の種類と項の共有には次のような制限がある。

(27) V2 : 常に**無意志動詞**、特殊な場合を除き**自動詞**。 V1 : 意志性・他動性の制限なし。

(28) **いずれかの項が共有**されなければならない。(  $S_1=S_2$ ,  $A_1=S_2$ ,  $O_1=S_2$  のすべてが可)

すなわち、「炊く - 飯 - 帰る」のような、V2 に意志動詞が現れた動詞連続は許されない。  
分離型には意味的に見て3つのタイプがある。

(i) V2 が V1 の偶発的な結果を表す。時系列順に並べられるという点で連結型と共通する。しかし、連結型と違って、(29)~(33)のように V1 の取る非主語名詞句が現れることができる。

(29) jə ʔán mì blè  
1sg 食べる 飯 腹一杯の 「私はご飯を食べて腹一杯になった」

(30) mijə bá ká θi  
猫 ぶつかる 車 死ぬ 「猫が車にぶつかって死んだ」

(31) jə dɔ́ thwí θi mèn  
1sg 殴る 犬 死ぬ (成り行き) 「私が犬を殴ったら、犬が死んでしまった」

(ii) V2 が V1 の様態を表す。V2 は状態動詞。非時系列順。

(32) ʔəwé ʔán mì phlé  
1sg 食べる 飯 速い 「彼のご飯を食べるのが速い」

(iii) V2 が可能を表す。V2 に現れる動詞は限られている。非時系列順。

(33) ʔəwé nân ká θi  
3sg 運転する 車 できる 「彼は車を運転することができる」

### 3.3 動詞連続の峻別における語順の重要性

連結型の(a)および(d)のタイプは、V2 が自動詞で結果を表すという点で、分離型の(i)のタイプと共通点を持つ。連結型・分離型の区別において語順が重要な役割を果たす。

#### 3.3.1 連結型(a)と分離型(i)の区別

次のように、V1 と V2 の間に別の要素が現れていれば、これが分離型であることが分かる。

(34) ʔəwé lánthé ló xân lòn θi mèn  
3sg 落ちる Loc 梯子 上 死ぬ (成り行き) 「彼は梯子の上から落ちて死んだ」

しかし、(35)のように動詞が隣り合っていると、連結型であるか分離型であるかは分からない。

(35) ʔəθi lánthé θi ʔé  
3pl 落ちる 死ぬ Neg 「彼らは落ちて死ぬということがなかった / 彼らは落ちたが死ななかった」

否定辞 lə の場合、この違いは lə が V1 に前置されるか V2 に前置されるかで区別される。

(36) ʔəθi lə lánthé θi bá ʔəkhócòn ...  
3pl Neg 落ちる 死ぬ Neg ので 「彼らは落ちて死ぬということがなかったので...」

(37) ʔəθi lánthé lə θi bá ʔəkhócòn ...  
3pl 落ちる Neg 死ぬ Neg ので 「彼らは落ちたけれども死ななかったので...」

したがって、lə の位置すなわち表面的に見れば語順によって、連結型であるか分離型であるかという構造上の違いが表されることになる。

### 3.3.2 連結型(d)と分離型(i)の区別

連結型の(d)タイプにおける V2 が表す結果は、あくまでも動作主によって目論まれた事象であり、その結果が実際に生じたことは含意されない。したがって、(26)の後に V2 を否定する文を置いても矛盾しない。(38)に示すとおりである。

(38) jə dɔ́ θi thwí. lánânθi θi ʔé  
1sg 殴る 死ぬ 犬 しかし 死ぬ Neg 「私は犬を殴り殺そうとした。しかし死ななかつた」

しかし、分離型における結果は、動作主の意図とは関係のない偶発的な事象である。したがって、(31)の後に V2 を否定する文を置くと矛盾を生じてしまう。

(39) jə dɔ́ thwí θi mɛ̀ɪN. \*lánânθi θi ʔé  
1sg 殴る 犬 死ぬ (成り行き) しかし 死ぬ Neg  
「私が犬を殴ったら死んだ。しかし死ななかつた」

例文(38)の動詞連続と(39)の動詞連続は、表面的には名詞 thwí の置かれる場所が異なるのみである。すなわち、語順によって構造の違い、ひいては意味の違いが表されるのである<sup>iv</sup>。

## 4. 関係節の位置

先に例文(9)で、名詞主要部が主語のときは関係節が後置されることを示した<sup>v</sup>。しかし、名詞主要部が定(definite)であるとき、次のように関係節を前置することが可能である。

(40) [ xilá chɛ̀ɪnpràn tɛ̀ ] ʔə mé nó  
美しい 清らかな 非常に 彼女の 顔 その 「たいへん美しく清らかな彼女の顔」

このような前置型の関係節は、名詞主要部が定であることを示すために用いられているように見えることがある。次の(41)と(42)は、同一のエッセイの中の連続する文である。「水の中に混ざっている空気」は(41)の文で読み手の知るところとなったため、(42)では、「空気」を修飾する関係節が名詞主要部に前置されている可能性がある。

(41) li [ ʔódɛ̀ɪN wɛ̀ ló thí klà ] θiləphá cáinθán khwái wɛ̀ thɔ̀Nʔə́lɔ́schɛ̀ɪN ʔəkhɔ́cɔ̀N,  
空気 混ざる Vpt Loc 水 間 pl 出る Vpt Vpt 全部 ので  
já mə θáθánθálàn li θiləphá lə ʔó lɛ̀N bá,  
魚 Irr 呼吸する 空気 pl Neg ある もはや Neg  
ʔəθíwɛ̀ θi khwái mwɛ̀bò ló  
3pl 死ぬ Vpt なのだ (強調)

「(水が沸騰して)水の中に混ざっている空気が全部出てしまったので、魚が呼吸するための空気がなくなってしまう、魚たちは死んでしまったのだ。」

(42) ló thí khɔ́ ʔəklà nó [ ʔódɛ̀ɪN càdɛ̀ɪN wɛ̀ θà ] li θiləphá cáinθán khwái ʔəkhá nó,  
Loc 水 熱い 間 Top 混ざる 混ざる Vpt Vpt 空気 pl 出る Vpt 時 Top  
pə mə dá bá ló thilápjàsɔ̀phlɔ́sɔ̀N θi ɣɛ̀ lá θán nó chī ló  
1pl Irr 見える Vpt Com 泡 pl 来る わく上がる のだ(婉曲) 強調

「熱くなった水の中から、混ざっている空気が出るときに、泡が発生するのが見えるのである。」

## 略号

1	一人称	NC	助数名詞
2	二人称	pl	複数
3	三人称	Que	疑問を表す助詞
Com	補文を表す助詞	sg	単数
Irr	非現実法を表す助詞	Top	主題を表す助詞
Loc	位置、出発点、到着点を表す助詞	Vpt	動詞助詞
Neg	否定を表す助詞		

## 引用文献

- Aikhenvald, Alexandra.Y. and Dixon R.M.W. (eds.) (2006) *Serial Verb Constructions: A Cross-linguistic Typology*. Oxford : Oxford University Press
- Benedict, Paul K. (1972) *Sino-Tibetan: A Conspectus*. New York: Cambridge University Press.
- Haudricourt, André-G. (1946) Restitution du karen commun. *Bulletin de la Société de Linguistique de Paris* 42.1:103-11.
- Haudricourt, André-G. (1975) Le système des tons du karen commun. *Bulletin de la Société de Linguistique de Paris* 70.1:339-43.
- 加藤昌彦 (1998) 「ポー・カレン語の動詞連続における主動詞について」 『言語研究』 113:31-61.
- 加藤昌彦 (2001) 「ポー・カレン語(東部方言)の関係節」 『東京大学言語学論集』 20:275-300.
- Kato, Atsuhiko (2009) A basic vocabulary of Htoklibang Pwo Karen with Hpa-an, Kyonbyaw, and Proto-Pwo Karen forms." *Asian and African Languages and Linguistics* 4:169-218.
- Jones, Robert B. (1961) *Karen Linguistic Studies*. Berkeley and Los Angeles: University of California Press.
- Matisoff, James A. (2003) *Handbook of Proto-Tibeto-Burman*. Berkeley, Los Angeles and London: University of California Press.
- Phillips, Audra (2000) West-Central Thailand Pwo Karen phonology. *33rd ICSTLL Papers*, pp.99-110. Bangkok: Ramkhamhaeng University.
- Shintani, Tadahiko (2003) Classification of Brakaloungic (Karenic) languages in relation to their tonal evolution, in: Shigeki Kaji (ed.) *Proceedings of the Symposium Cross-linguistic Studies of Tonal Phenomena: Historical Development, Phonetics of Tone, and Descriptive Studies*, pp.37-54. Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa.
- Solnit, David (1997) *Eastern Kayah Li: grammar, texts, glossary*. Honolulu: University of Hawai'i Press.
- Van Valin, Robert D. Jr. and Randy J. LaPolla (1997) *Syntax: structure, meaning and function*. Cambridge: Cambridge University Press.

<sup>i</sup> カレン系言語の歴史的研究としては、Haudricourt (1946, 1975)が重要である。カレン系言語内部の系譜関係については Jones (1961)で初めて論じられたが、様々な問題がある。カレン諸語の系譜関係について論じた最新の最も信用に足る研究として Shintani (2003)がある。

<sup>ii</sup> 表 1 は Phillips (2000)の方言分類を改良したものである。

<sup>iii</sup> ポー・カレン語の動詞連続については加藤(1998)を参照されたい。他のカレン系言語の動詞連続についての詳しい記述には Solnit (1997: Chapter 4)などがある。連結型と分離型はそれぞれ Aikhenvald and Dixon (2006)の contiguous serial verb construction と non-contiguous serial verb construction に相当する。Van Valin and LaPolla (1997)の取る立場に依拠するならば、連結型は nuclear juncture、分離型は core juncture に該当すると考えられる。

<sup>iv</sup> Aikhenvald and Dixon (2006:51)は動詞連続の iconicity に関連して、"The closer the verbs are in surface structure, the lesser conceptual distance between the subactions they denote."と述べる。ポー・カレン語の連結型と分離型の意味的差異はこの主張に合致する。

<sup>v</sup> ポー・カレン語の関係節については加藤(2001)を参照。

\* 草稿を読んで様々な観点から貴重なコメントをくださった野島本泰氏に感謝の意を表したい。